

上好昭孝先生を偲んで

理事長 河崎 建人

大阪河崎リハビリテーション大学初代学長上好昭孝先生におかれましては、平成29年10月8日に逝去なされました。上好先生の本学に対するこれまでの多大なるご功績に改めて感謝申し上げますと同時に、もうお会いできない寂しさに万感胸にせまる思いが込み上げてきます。

上好先生は昭和39年に和歌山県立医科大学を卒業後、一貫して整形外科領域の研究・教育・診療に従事され、和医大整形外科教室の助教授を経て平成11年4月に同大学リハビリテーション科の初代教授に就任なされました。当時、公立大学では全国で初めて創設されたりハビリテーション科の初代教授として創設期の教室運営に大いに尽力なされました。研究面におかれましては、整形外科及びリハビリテーション医学における様々な装具の開発に取り組み、現在も広く臨床応用される等医学・医療への貢献は多大なるものがありました。平成16年4月よりは本学の前身の河崎医療技術専門学校校長に就任していただき、平成18年4月に大阪河崎リハビリテーション大学開学と同時に初代学長として本学の礎の確立に全身全霊打ち込んでいただきました。

上好先生は医療従事者は人の痛みがわからなければならないとの信念のもと、自ら教壇に立たれ、本学の建学の精神である「夢と大慈大悲」を学生に伝え、多くの優秀なりハビリテーション専門職を養成なされました。先生はこれからの医療にはチーム医療の充実が不可欠であるとの認識で、コメディカルの教育に対する熱い想いを常に語っておられたのが懐かしく思い出されます。

平成24年3月先生は学長を退任なされ名誉教授の称号を授与なされましたが、その後も障害者支援施設や障害者地域生活相談支援センターで障害者の皆さんのリハビリテーションや地域支援に積極的に関わってこられ、生涯リハビリテーションに打ち込まれるお姿に頭が下がる思いでありました。平成28年春の叙勲において、これまでの先生の教育・研究のご功績に対して瑞宝中綬章を受章なされ、同年11月の法人創立20周年・開学10周年記念式典でのご受章お祝いの会での先生の笑顔が思い出されてまいります。

上好先生、本当にありがとうございました。先生の本学への情熱を引き継ぎ、全教職員が一丸となって本学の発展に向け頑張っております。

上好昭孝先生への感謝

学長 亀井 一郎

上好昭孝先生の御高名は、もちろん存じ上げておりましたし、和歌山県立医科大学同窓の大先輩でもあり、そして大阪河崎リハビリテーション大学々長としても尊敬すべき初代の先輩でありました。したがって環境の上では、私にとりまして大いに近い先生であったわけです。思い起こしてみますと、学生時代に整形外科の講義をいただいた日々のお優しい笑顔と、几帳面な御講義内容は記憶しておりますが、その後は、和歌山医大病院の廊下ですれ違う時、恐れ多い雲の上の存在の先生に対して深く礼をさせていただいたことくらいしか記憶にございません。

医師として若手から中堅と呼ばれる年代にありました頃の私は、関連病院での修行時代が長く続き、その間、大学病院で名を馳せ職位の階段を上って行かれる上好先生にご指導いただく機会は、残念ながらほぼ無かったわけです。もちろんその間の膨大な御業績は存じ上げており、まさに遠くから高い山を見上げているような感覚の私でありました。

時を経て、上好先生が苦心惨憺されて基盤を築きあげられた本学に不肖私が奉職することになりましたが、ここでも先生とは完全なすれ違いとなり、お会いする機会には恵まれませんでした。

上好先生は常に泉州・和歌山地域におけるリハビリテーション医学のリーダーとして分野の医学的研究、臨床、教育に心血を注がれ、和歌山医大においては初代リハビリテーション科教授、大阪河崎リハビリテーション大学においては初代学長として無尽蔵の優秀な後進を育てられ、輩出されました。何事においても「初代」は想像を絶するほどのエネルギーと先見性、決断力を要します。それらを見事に持ち合わせた上好先生は、専門学校校長時代を含めて8年に渡り当河崎学園をリードされました。当然の結果として平成28年春の叙勲において、瑞宝中綬章を受章されましたことは、私たち後輩にとりましてこの上ない慶びであり、誇りであります。

直接にご指導いただけませんでしたでしたが、先生の遺された数々の御功績とお教えを忘れることなく、前を向いて、大阪河崎リハビリテーション大学は邁進することをお誓い申し上げます。

リハビリテーション医学の王道を歩んだ上好昭孝先生

副学長 寺山 久美子

上好昭孝本学初代学長先生は平成29年10月8日（日）に別の世界に旅立たれました。享年79歳、まだまだご活躍が期待される年齢でした。

上好先生にはじめて正式にお会いしたのは、私が本学に着任した直後の入学式に参列した平成21年4月でした。それ以前には、共に日本リハビリテーション医学会の正会員として学術集会や委員会活動でお顔を合わせたことはありましたが、お話する機会はありませんでした。「装具療法のエキスパート」として存知あげておりました。私の本学着任にあたって上好先生は、専門学校長としての、また大学の準備期間を含め学長としての経験を通して、私学経営の課題や本学の状況、法人と関連施設との関係、リハの発展途上県としての特に和歌山県の特徴を流暢ではないが熱意ある語り口でお話されました。先生は平成24年3月末日の学長任期満了までの6年間に亘り、草創期の本学を指導され、学生には1年次に「リハビリテーション概論」を自著に基づいて、リハの基本理念やマインド等熱意をこめて教育され、本学の基礎を築かれました。残念なことに、先生は平成23年度に予定されていた日本高等教育評価機構による外部認証評価を前にして病に倒れ入院されました。しかし、10月の現地審査の初日には、病を押して出席され、評価機構の評価員を前に、本学代表としてご挨拶され、立派に学長の職責を果たされたことを誇りに思いました。大学退職後の平成28年春には、本学からの推薦もあって、「瑞宝中綬章」を受章され、久しぶりに元気なお姿とお声に本学主催の祝賀会で接することができました。

先生はリハ職の教育の他、リハ医学の発展にも大きな足跡を残されました。和歌山医科大学を中心に研究活動を展開され、リハ医学の中に「装具療法」の分野を確立され、公立大学としては初のリハ部門の教授に就任、我が国リハビリテーション医学のためにも尽力されました。平成28年には、このような功績により、公益社団法人日本リハビリテーション医学会より「功労会員」に推挙されました。

本学退職後も、リハ医学会学術集会で折々お会いしており、お元気そうで安堵しておりました。

我が国におけるリハ医学はわずか50余年の歴史ですが、その中であって、教育・研究・社会貢献と「リハ医学の王道」をいく仕事をされつづけてきた上好先生は、リハビリテーションに特化した高等教育研究機関である本学の誇りでもありました。これからも本学をお見守りください。

上好昭孝先生を偲んで

図書館長 小西 正良

初代学長であった上好昭孝先生は平成29年10月8日に天空への道につかれた。その通夜式・告別式の祭壇には叙勲の式典に臨まれたふくよかで優しそうな笑顔の遺影が強く印象に残っている。通夜式においては、愛弟子である和歌山医科大学田島 文博教授が上好先生の幾多のご功績を披露され、本学退官後もリハビリ分野の発展や後進の育成に尽力され続けた。またご家族からは、三女をもうけられ悲しみに暮れる言葉でなく感謝と尊敬の言葉が表されて、驚きを覚えた。

上好先生に初めてお会いしたのは、「大学設置室」として簡単な椅子と机が置かれただけの水間病院の一室であった。すでに閉校が決まった3年制専門学校「河崎医療技術専門学校」の校長として学校運営に携わり、困難の極まる閉校の道筋を指揮されていた。また、4年制大阪河崎リハビリテーション大学初代学長予定者として、開学準備、および開学後の大学構想を具体的に進められた。初代専攻長候補者として挙げられた各分野での方々には、自らの夢を語り、大学の将来構想を披露し、リハビリのあるべき姿を、未来を示された。それはホテルのロビーであり、駅の雑踏であり、教室であった。さらに開学のために必要かつ難航するであろう教員の確保において、和歌山県立医大の現職教員の協力を得て意図も簡単に整えられた。

文科省から開学が正式に認可され、学生確保のために高校訪問が重要な業務となった。本学の立地から大阪南部の泉州地域および和歌山県下の高校を学長自ら訪問された。公用車の窓から差し込む日差しは暖かさを伴わず、ただ、ただ眩しいだけ。飛び込みでの高校訪問に、臆することなく先頭を切って突き進まれた。大学入試においても、リハビリテーション部門で活躍され、この分野での未来を担う人材の育成にとって必要とされる資質を、既存大学とはやや異なる方法で見極めるためにPISA型入学試験の導入を試みようとした。

「コンソーシアム」という機関が府県ごとに大学長の互助的な連絡会として設置されている。大阪府下では「大学コンソーシアム大阪」に加入をされた。新設の大学にとって、存在感を認めてもらい、大学の一員としての地位を向上させるため積極的に奔走された。大規模大学である近畿大学、関西大学の学長とも気後れすることなく、斬新な提案や提言をなされたことが認められて、同会の高大連携委員、国際交流委員を任された。

かけがえのない大きな存在が、悲しみはいついつまでも消えない思いですが、本学の発展と旅立った卒業生のリハビリ領域での活躍を見守ってくれることと思います。

上好先生の数々の思い出も胸にし、リハビリの人材育成に邁進することを改めてお誓いいたします。



故 上好昭孝 初代学長 略歴・主要業績

略歴・職歴等

昭和 39 年 3 月	和歌山県立医科大学卒業
昭和 40 年 4 月	同大学研究生（甲）（整形外科学教室）
昭和 44 年 10 月	同大学整形外科学教室助手
昭和 47 年 6 月	社会福祉法人恩賜財団済生会和歌山病院副院長
昭和 48 年 11 月	和歌山県立医科大学整形外科学教室助手復帰
昭和 51 年 4 月	医学博士（和歌山県立医科大学）取得
昭和 52 年 1 月	和歌山県立医科大学整形外科学教室講師
昭和 61 年 12 月	同大学助教授
平成 11 年 4 月	同大学リハビリテーション科初代教授
平成 15 年 3 月	同大学 退官
平成 15 年 4 月	学校法人関西医療学園関西鍼灸大学招聘教授（平成 16 年 3 月まで）
平成 16 年 4 月	学校法人河崎学園河崎医療技術専門学校校長、 学校法人河崎学園大阪河崎リハビリテーション大学準備室長
平成 18 年 4 月	学校法人河崎学園大阪河崎リハビリテーション大学学長・学部長・教授
平成 24 年 3 月	同大学任期満了により退職
平成 24 年 4 月	同大学名誉教授
平成 24 年 4 月	社会福祉法人ゆたか会障害者支援施設リハビリ橋本副理事長及び障害者 地域生活相談支援センターリハビリ橋本センター長
平成 28 年 4 月	瑞宝中綬章受章
平成 29 年 10 月	逝去

主要業績

【著書】

- 1993年 七川勸次 監修『リウマチ病セミナー IV』永井書店, pp.67-77. (共著)
- 1994年 伊丹康人, 西尾篤人 編『整形外科 MOOK 増刊 2-B』, 金原出版, pp.20-25. (共著)
- 1997年 上好昭孝 著『骨・関節疾患の臨床血液検査診断ポケットブック』金原出版. (単著)
- 2000年 米本恭三 他 編『リハビリテーションにおける評価 Ver.2』医歯薬出版, pp.313-320. (共著)
- 2003年 清水克時 編『新 OS NOW orthopedic surgery』メジカルビュー, pp.101-105. (共著)
- 2014年 上好昭孝, 田島文博 編『リハビリテーション概論: 医学生・コメディカルのための手引き書 (改定第3版)』永井書店, pp.1-34. (共著)

その他多数

【論文】

- 1976年 体幹用装具の研究—特に腹部圧迫の問題を中心として—. 日整会誌 50:255-273.
- 1979年 変股症に対する和医大式股関節用 S-splint—10代の変股症—. Hip Joint 5:183-188.
- 1985年 Studies on spinal braces-especially concerning the problem of pressure on the abdomen; Int Orthop 9, pp255-258.
- 1990年 腎不全透析患者における骨病変に対する性ホルモン (エストラジオール、テストステロンなど) の影響について. 腎と骨代謝 3:221-229.
- 1990年 Blood concentrations of parathyroid hormone and osteocalcin (BGP) in patients with rheumatoid arthritis. Japanese Journal of Rheumatology 2:273-280.
- 1991年 慢性関節リウマチに対する Bucillamine の臨床血液検査と Immunoglobulin の推移. 臨床リウマチ 3:228-232.
- 1992年 Clinical appraisal of vinpocetine for the removal of intractable tumoral calcinosis in haemodialysis patients with renal failure; J Int Med Research 20(5):435-443.
- 1992年 慢性関節リウマチ患者における免疫抑制酸性蛋白 (IAP, immunosuppressive acidic protein) の測定意義. リウマチ 32:131-134.
- 1993年 リウマチにおける性ホルモン 骨代謝マーカーと骨. Clinical Calcium 3:1030-1036.
- 1995年 RAにおける人工関節の適応と問題点—Osteoporosisを中心に—. 臨床リウマチ 6:178-185.
- 1995年 腎不全透析患者の腰椎骨塩量およびPTHの比較. 日骨形態誌 5:81-86.
- 1999年 リウマチの診断及び薬物治療 リウマチの骨粗鬆症. 骨・関節・靭帯 12:489-499.
- 2002年 股関節疾患に対する装具療法の位置づけと有効性. 関節外科 20:1551-1558.
- 2003年 リウマチ患者の生活支援. 診断と治療 91:879-882.
- 2004年 ADL・IADL 訓練と QOL 高齢者の骨折. リハビリテーション MOOK 9:135-144.
- 2006年 長期臥床による骨粗鬆症発生のメカニズムと予防. Medical Rehabilitation 72:45-53.
- 2007年 股関節症に対する保存療法 股関節用 S-splint を中心に. Hip Joint 33:130-134.

その他多数